

今日も島には 弥生の風が吹く

吉 岐における日本遺産の目玉といえ
ば、長崎県で二番目に広い平野で
ある深江田原^{ふかえただばら}に広がる弥生時代の環濠集
落跡「原の辻遺跡」。「魏志」倭人伝には
三十一の国の名が記されているが、国の
王都が特定されているのは国内で唯一、
ここだけ。この場所こそ一支国の王都で
あり、世界に開かれた対外交流の拠点
だったのだ。

原の辻遺跡には建物ややぐら、門など
が復元されていて、自由に見学するこ
とができる。遺跡の中を歩いていると、ま
さに二千年の時を超えて弥生の世界が目
の前に現れたような錯覚を覚える。景観
保持のためにこの辺り一帯は無電柱化さ
れていることもあり、周囲には人工物が
少なく、弥生の原風景を見るようだ。ま
た日本的な竪穴住居や大陸の技術を取り
入れて建てられた建物があるほか、収穫
した米や麦を入れたと思われる穀倉^{こくそう}には
ねずみ返しが見られるなど、当時の暮ら
しぶりが目に浮かぶ。

原の辻遺跡では日本最古の船着き場跡

をはじめ、いくつもの珍しいものが見つ
かっている。その代表格が国内唯一の人
面石。祭器として使用されたと思われる
人の顔をかたどった石は、まるでムンク
の絵画「叫び」のようだが、その顔には
うっすら眉毛があり、ユーモラスな印象
も受ける。

また古いに使われていたと思われるト
骨と呼ばれるシカやイノシシの肩甲骨も
発掘されていて、当時の人々は動物の骨
を焼いて吉凶を占い、行事や収穫の時
期、航海の日取りなどを決めていたと考
えられている。

このほか同じく弥生時代の環濠集落跡
「カラカミ遺跡」では、日本最古のイエ
ネコの骨が見つかっている。弥生の人た
ちは収穫した米をねずみから守るため、
大陸から持ち込まれたであろうネコと暮
らしを共にしていたのだろう。こうした
数々の発見は、私たちが教科書で学んだ
弥生人のイメージに新たな彩りを添えて
くれる。

原の辻遺跡の発掘は現在も続けられて
いるが、百ヘクタールにも及ぶ広大な範
囲のため、これまで調査が行われている
のは全体の十五パーセントほど。その大
部分はベールに包まれている。もしかす
ると、まだ見つからない王の墓な
ど、思いもよらぬ宝物が発掘されるかも
しれない。

祭祀で使われていた
とされている人面石。



吉岐には真っ直ぐな木が少なく、
建物は枝の分かれ目を上手に
使って建てられた。米を守るための
ねずみ返しもご覧の通り。

